

栗原さんの 体験談が掲載！



栗原 正利
Masatoshi Kurihara

1986年、関西の大手電機メーカーに入社。
国内・海外製造拠点の品質改善活動や人材育成の業務に従事。
定年3年前から日本語教師になるための勉強を開始し、
2023年3月にKEC日本語学院で日本語教師養成講座を修了。
同年9月定年退職し、10月より日本語教師として活躍している。

KEC日本語学院修了生

日本語教師として
活躍中！

PHP社「The21」10月号(9月5日発売)特集「いま取るべき「資格」の選び方・学び方」内にて、KEC日本語学院修了生、栗原正俊さんの体験談が掲載されました。日本語教師の資格取得を目指している方にとつて参考になる内容となっております。ぜひご一読ください。

KEC日本語学院

新宿校 | 梅田本校 | なんば校 | 枚方本校 | 京都校 | 神戸校

「学び」の
体験談①

定年直前に資格を取得し、「日本語教師」に転身

「第二の人生」を充実させるため やりたい仕事の資格を取得

定年の3年前、「第二の人生では別のことをしたい」という思いを抱き、日本語教師を目指すことにした栗原氏。働きながらの「通信教育講座」や、その後、420時間の「養成講座」に切り替えての受験など、合格に至るまでの苦労や学びなどを聞いた。

取材・構成：林 加愛

定年3年前に知った 日本語教師という仕事

——まずは「日本語教師」という仕事を志された経緯から、教えてくださいませんか？

栗原 もともとメーカーで技術系の仕事に携わっていましたが、定年が近づく中で「第二の人生では別のことをしたい」という気持ちを持つようになりまして。その矢先、社内を歩いていると、ある部屋から活気あふれる声が聞こえてきたんですね。それは、海外の社員を対象とした日本語の授業でした。

——社内で日本語を教えていたのですか？

栗原 はい。週2回の社内講座に、日本語学校から派遣された先生が来られていました。そこで初めて「日

日本語教師
栗原正利
Masatoshi Kurihara

1986年、関西の大手電機メーカーに入社。国内・海外製造拠点の品質改善活動や人材育成の業務に従事。定年3年前から日本語教師になるための勉強を開始し、2023年3月にKEC日本語学院で日本語教師養成講座を修了。同年9月定年退職し、10月より日本語教師として活動している。

本語教師」という仕事を知りました。私も海外工場でレクチャーをした経験はありましたが、言葉はもっぱら通訳の方任せ。日本語そのものを教える仕事に興味を引かれ、57歳からチャレンジを始めた次第です。

——日本語教師になるには、どのような方法があるのでしょうか。

栗原 主に二つの道があります。当時で言うと、一つは「日本語教育能力検定試験」に合格する方法。もう一つは「日本語教師養成講座」を420時間受けて修了する方法です。このうち、最初に私が選んだのは検定合格を目指す道でした。1年3カ月にわたって養成講座に通うのは少々ハードだ、と思ったからです。

予想を超える難関に 四苦八苦

——お仕事と並行で通学するのは確かにハードですね。

栗原 加えて、以前に「QCC検定」1級を取得していたことも念頭にありました。この検定の合格率は約10%で、日本語教育能力検定試験は約30%。ならばたぶん合格できる、と単純に考えてしまいました。

——検定に向けては、どのような方法で勉強されましたか？

栗原 まず通信教育講座を申し込みました。毎月テストを受けながらステップアップしていく形式で、内容は検定対策に特化されています。

これを1年間みっちりやれば大丈夫…….と思いきや、甘かったです。初めての試験は、まったく歯が立ちませんでした。

——思った以上に難関でしたか。

栗原 日本語教育能力検定の試験は、難しいうえに長いんですね。3部構成で、試験Ⅰの基礎問題が90分、Ⅱの聴解(リスニング)問題が30分、Ⅲの応用問題はマークシートと記述を合わせて120分。体力的にも精神的にも地獄でした(笑)。

——きついんですね！ それでもひるまず再挑戦を？

栗原 2年目は通信教育のテキストを丹念に復習し、加えて、過去問対策を徹底しました。過去5年分を取り揃えて勉強し、日本語教師の方のブログやYouTube上の講座でも知識を補強。しかし、またあえなく不合格となってしまいました。

準備が大変だった 養成講座の模擬授業

——苦しい状況ですね。

栗原 定年も近づき、3年目も落ちたらどうしよう、と悩みました。そんなある日、会社と自宅の間に日本語教師養成講座を設けている学校があることに気づいて、講座内容について尋ねてみたところ、むしろこちらが私に合っていたと気づきました。多くの受講生が仕事と並行で学び、しかも私と同年代だとのこと。

そこで私も、毎週土曜日に講座を受け始めました。

——「養成講座はハードかも」と予測されていたが、実際はいかがでしたか？

栗原 ハードでした(笑)。最初の6カ月はオンラインの基礎講座。その後の6カ月は、他の受講生を学生に見立てての模擬授業を行ないます。そして最後の3カ月間は、外国人の方が学生役になって行なう教育実習。学生役の皆さんと講師からフィードバックを受けつつ、授業をブラッシュアップしていきます。

——徹底的な実践重視ですね。模擬授業は何分あるのですか？

栗原 通常は7分ですが、当時はコロナ禍の影響で受講者が少なかつたため各々20分。その準備の大変さたるや……部屋にホワイトボードを置き、板書の構成を考え、口頭で伝える言葉・想定質問・その回答を一言一句みっちり用意しました。

——確かに大変ですね。特に苦労されたポイントは？

栗原 日本語を日本語で教える「直接法」の難しさです。どの国の方にも均等な教育ができるよう、特定の他言語を使わず日本語だけで教えるこの方法、初級に近づくほど難易度が上がります。使える日本語が限られるので、ジェスチャーや絵などあらゆる方法を駆使しなくてはなりません。

——とてもハイレベルですね。養成講座を修了すれば資格が取得できるのもうなすけます。

栗原 ただ、私はその時点で検定も諦めていませんでした。合格証明書があれば、書類を何種類も用意せず、1枚で就職活動ができるからです。

3年にわたる挑戦の間に「夢」が育っていた

——養成講座と検定対策の並行となると、ご自宅での勉強時間も長くなりそうです。

栗原 休日は6時間、平日は帰宅後の2時間を勉強にあてました。仕事のあとは疲れているので、YouTubeの講義を視聴することが多かったですね。すでに独立した子どもの部屋を勉強部屋に使わせてもらって、環境には恵まれていたと思います。

——時間を捻出するために工夫されたことはありますか？

栗原 まず行なったのは「テレビ禁止」。ニュースと食事のとき以外は観ないと決めました。次いで「趣味禁止」。模型作りが好きなのですが、合格するまでは、と我慢しました。

——勉強の効率化の工夫についてはどうでしょう。

栗原 わからないことがあったら、あれこれ調べるよりも、プロ＝養成講座の先生に聞くようにしていました。そのほうが素早く理解できます

日本語教師はこんな仕事

仕事内容

- 日本語を母語としない外国人学習者に対して、日本語の読み書き、会話、文法、発音などを教える
- 日本の文化や生活習慣、歴史などを伝え、学習者の進学や生活のサポートも行なうことも



具体的には(一部)

- 日本語の指導
(初級レベルではひらがな、カタカナ、簡単な会話、中上級レベルでは高度な文法、表現、ビジネス日本語など、学習者のレベルや目的に合わせた指導を行なう)
- 授業の準備
日本語学校のカリキュラムに沿って、テキストの補足説明資料などを作成する

し、現場に即した実践的な知恵を得られます。もう一つ、「計画」も効率化につながりました。膨大な試験範囲と照らし合わせて、向こう1年間のスケジュールを漏れがないよう組み立て、予定通り進んでいるか、ムダな時間が発生していないかを随時チェックしながら進めました。

——とてもストイックな栗原さんですが、モチベーションを保てたのはなぜでしょう。

栗原 煮詰まり過ぎないように、ときどきウォーキングをしていました。加えて、思った以上に効果的だったのがSNSです。最初は自分用の記録としてツイッター(現・X)でつぶやくだけでしたが、次第に仲間と励まし合う場になりました。面

白いことに、試験に落ちるたびフォロワーが増えるんですね(笑)。落ちたときも温かいフォローのコメントをたくさんもらえました。

——嬉しいですね。くじけそうなときの支えになりました。

栗原 まさに。実際、3回目に落ちたときは正直「もうやめよう」と思ったのですが、仲間の声に助けられました。もう一つ、支えになったのは「夢」です。合格の先にある「日本語教師になる」という強い気持ちで踏みとどまりました。

——その気持ちは、挑戦する間に育ったものですか？

栗原 そうです。定年3年前時点では「なれたらいいかな」程度の希望でしたが、養成講座で教える体験

栗原さんお勧めの勉強法&モチベーション維持法

勉強法

- 仕事後の勉強は、YouTube 講義の視聴
- 子どもの部屋を勉強部屋に使う
- わからないことがあれば、すぐにプロに聞く

モチベーション維持法

- 「テレビ禁止」
(ニュースと食事のとき以外は観ない)
- 「趣味禁止」(合格するまで我慢)
- SNSを用いて仲間と励まし合う



検定対策よりも 必要なのは「現場力」

をするたびにどんどん熱が高まり、「どんなに大変でもこの仕事に就きたい」と思うようになっていました。

——こちらまで応援したくなるお話です。そこらどのように夢を叶えられたか、教えてください。

栗原 その後、新しい資格ができたことで潮目が変わりました。コロナ禍が終わって再び日本で学ぶ外国の方が増えてきたのを背景に、国が「登録日本語教員」という国家資格を創設したのです。こちらは基礎試験と応用試験の二部構成で、養成講座修了者は基礎試験が免除されるシステム。暗記事項の多い基礎試験を受けずに済み、結果、一度の受験でめ

でたく合格できました。

——おめでとうございます！ 足掛け4年の奮闘、費用面でもかなりのご負担だったのでは。

栗原 そうですね……毎回、試験が1万7000円、養成講座が約60万円、国の教育訓練給付制度で10万円が修了後に支給されますが、通信教育講座が10万円程度ですから、私の場合、70万円以上かかっています。そう考えると、通信講座は受けなくてよかったかもしれません(笑)。

——意外です。通信講座は検定対策として欠かせなかったのでは。
栗原 おっしゃる通り、検定対策としては有効です。とはいえ実際に教壇に立つてみるとわかるのですが、ものを言うのは検定に合格する力よりも、現場対応力なのです。私の

「今」につながっているのは、やはり養成講座だと思っています。

人と交流しながら 成長する喜び

——晴れて日本語教師となられた栗原さん。お仕事はスムーズに決まりましたか？

栗原 はい。前後しますが、国家資格取得前の2023年、養成講座修了後ほどなく決まりました。その頃はコロナ禍も終わっていて募集が急増していたため、至ってスムーズ。9月末の定年退職後、10月から日本語教師となり、今は週に2回日本語学校に勤務して、1日45分×5コマ教えています。他に前の職場でも技術の講師を務めるなど、二つほど仕事を掛け持ちしています。

——お仕事を3本並行ですか。お忙しいそうです。

栗原 仕事の拘束時間は長くないのですが、授業準備で忙しいです(笑)。日本語学校は普通の塾や学校と違い、毎年同じ内容を教えられるわけではありません。学生さんの習熟度は様々ですから、広範囲なテキストの同じ場所を教えることはめったになく、毎回新しい準備が必要になります。

——努力の日々は続きますね。

栗原 でも、やりがいには非常にあります。情熱を傾けた分、学生さんの反応がビビッドになり、話せるよ

うになっていくんですね。人が成長する姿を見るのは喜ばしいです。毎回、授業後に学生さんが「先生、また来週!」と言ってくれる瞬間も最高です。

——心温まりますね。「第二の人生では違うことを」という願いを実現されました。

栗原 まさにそうです。ただ、意外な共通点も感じています。私は前職でも、皆と一緒に現場でものづくりをすることが好きでした。コミュニケーションを取りながら何かを達成する喜びを、今は別の世界で感じているわけです。

ちなみに、なぜ「違うことをしよう」と思ったかという、私自身が新たな分野で一からスキルをつけて、成長したかったからです。人の成長と自分の成長を共に楽しめており、私は今、とても恵まれています。

——最後に、日本語教師に興味を持つ方々へ、ぜひアドバイスを。

栗原 現在、日本語教育の潮流は「現場力重視」に向かっていると感じます。検定で一発合格を狙う方は多いと思いますが、少々コストをかけても養成講座で現場力を鍛えたほうが近道ではないか、と個人的には思います。とはいえ、もちろん日本語学校によって求める人材も違いますから、まずは何校か見学に行くのが一番です。同じ道を志す方を、私も応援しています!